

壤断面はやや層の分化が見られる。これに対し耕地では層の分化はない。土壌の厚さについては雑木林と耕地との間に差はなかった。

以上の結果を基礎に奥名郷で植林地・耕地・雑木林において、三相分布、仮比重、粘土及び腐植含有率、また簡易ボーリングから、主に焼畑との関連からモデルを作成した。

国有産業従事者からみた小田原市の地域性

佐 山 弥 生

(1) 目 的

城下町・宿場町として古い歴史を持つ小田原市。その小田原市に今も残る固有産業の現状を把握する事。そして最終的に、その固有産業の従事者数の推移から小田原市の地域性を考察することを目的とした。固有産業として、小田原の特産品である箱根物産・小田原蒲鉾・そして梅干製造の要因である梅栽培の3点をあげて、文献資料と現地での聞き取り調査によって研究を行なった。

(2) 枠 組

第一章で地域の概観を述べ、第二章で梅栽培について栽培面積・農家数の推移から動向を探り、梅の依存度を調べることによって将来を展望した。そして、最後に梅干製造について触れた。第三章は、蒲鉾について取りあげ、原料魚と生産額・製造地から考察を行ない、第四章では、箱根物産について少し比重をかけて扱った。成立基盤と過程・生産額及び輸出額の変化、そして企業数並びに従事者数の人口比率の考察をし小田原市の地域性を見、まとめとした。

(3) 結 果

小田原市は、ここ十数年で急速に近代化が進み、従来の交通都市・商業都市としての機能を失ない工業都市へと移行しつつある。さらに首都東京の衛星都市としての性格を帯びようになってきた。この為、固有産業が小田原市に占める割合は、大きく後退した。しかし、梅栽培に関しては家族労力で済むという利点から兼業可能であり都市化する小田原にあって増加傾向を示している。また、蒲鉾は長い間に形成された市場・信用により安定した需要を持っている。そして、最大の悩みであった原料魚不足からは「クローカー」のすり身輸入により解放されようとしているし、新しい経営へと変わりつつある。箱根物産は、伝統品全般が持つ後継者不足などの問題を抱えているが、従事者の人口比率からみてその伝統は維持されていくであろう。必ずしも楽観できないが、新製品の開拓や経営の合理化・協同化、さらに木屑の有効な処理方法を考えていけば低い収益を高めることができる。このように、工業化しつつある小田原だが固有産業は依然存在し、今後も時代に応じ変化し存続されていくと思われる。

こうして小田原市は、近代工場が建ち住宅化の進む酒匂川兩岸や市の東北部、都市化する駅前のかで、小田原城に象徴されるべく、かまぼこ街など旧小田原町に古い歴史の面影を残している。